

# 「人逮捕

## 借金、流れ追及



大浜 民郎



大野 勝馬

係者の証言で、四人はこの詐欺分も含め総額約四十九億円の融資を協同住宅ローンから借り受けており、結局、金融業者への借金の穴埋め額は約三十億円前後にのぼるとともに、一部は愛人にも流れていたことがわかった。特捜部では四人の逮捕で大手デベロッパーとながりのある地上げ屋の実態や借金の流れについて徹底説明する方針。

逮捕されたのは、元住友商事建設不動産本部東京建設部部長、南條隆正(五十二)千葉県船橋市上山町三ノ六〇五、一五〇元同東京ビル事業部部長、織田晴行(五十一)東京都港区陶町一ノ二六、一三〇元元住友不動産住宅事業本部用地企画第四部長、大浜民郎(五十八)王子市高嶺町一六六七、二七〇、

む首都圏の五、六方所でビル用地取得や宅地造成目的で土地の買収を進めた。これらの先行取得(地上げ)資金はすべて「サム・エンタープライズ」(本社、東京都港区赤坂、盛田正昇社長)などの金融業者を通じ、不動産金融業(沖田商事一(本社、大阪府西区、沖田敏弘社長)など)から調達した。沖田商事など金融業者数社からの借入金返済は他の金融業者から借り、それを返済にあてるとしていたが五十八年三月末で、沖田商事への借金は十九億三千七百万円にもなり、他の金融業者の分も含め総額一億円にもなっていた。

どが進めていた町田市の「野津田住宅団地」(仮称)プロジェクトに関して協同住宅ローンから融資を受け、その金を借金の穴埋めにすることを計画。五十八年三月から四月にかけて「第一次分の土地買収は順調に進んでいる。第二次分の買収にかかりたいので二十二億円貸してもらいたい」とウソを言い、さらに土地の売却に反対していた地権者が土地売買予約金を受けとったとする預かり証や事業計画書などを偽造して提出した。そのうえで、住友商事が発行したように見せかけた融資あっせん依頼書、二七の知事あて土地売買等届出書のコピーを次々に渡して協同住宅ローンを信用させ、四月二十八日、住友銀行麹町支店の都市企画口座に十六億三千百四十四万円振り込ませてまじとった疑い。

関係者の証言では、もともと野津田住宅団地プロジェクトは住友商事がバックアップして都市企画設計が進めた正規の事業。協同住宅ローンは五十七年八月に都市企画に三十二億六千万円を融資した。しかし、四人は住友に無断で正規のプロジェクト資金として十億円をつぎ込んだだけで残り約十四億円は沖田商事や丸金商事など金融業者への穴埋めに充てた。ところが、これも返済金に困り、野津田住宅団地プロジェクトへの第二次融資と称して五十八年四月に十六億二千万円を融資させた。織田は金融業者への借金を失ったという点で大きな痛手だ。逆に鄭、胡、趙主流派にとっては、現在の大胆な改革路線がますます遂行しやすくなったともいえる。

## 葉劍英氏死去



葉劍英

【北京二十一日共同】新華社は二十一日、葉劍英・元党副主席(前中央政治局常務委員、前党中

央軍事委員会副主席、前傘代常務委員長)が同日午前一時十六分、病気のため北京で死去したと伝えた。八十九歳(新華社の死亡公告では九十歳)だった。葉氏は一八九七年廣東省生まれで、モスクワ東方大学入学、一九三五年には長征にも参加した同党第一世代の古参黨員。軍人で朱徳、彭徳

饒らとともに中国の「土元帥」の一人でもあった。文化大革命中の六七年に中央軍事委員会の副主席となり、七二年に林彪副主席が失脚してからは国防相、党副主席に就任するなど彪なさまあとの中国軍最高首脳となっていた。七六年十月の江青夫人ら四人組逮捕でも大きな役割を果たし、その後の華国鋒党主席の体制を支えられたこともあった。葉氏は八三年十月、第十二期第一回中央委総会に出席後、高齢との感が強い

肉体的衰えのため公式の場に姿を見せることも少なくなり、八三年二月には全人代常務委員長解任を表明、療養のため政治生活から遠ざかり、八四年十月の同党第十二期第三回中央委員総会(三中総会)に欠席、八五年の四中総会でも引退した。

近年の中国の対外開放政策、資本主義的要素も導入した経済建設政策などは、すべて葉氏の積極的参画なしに決められてきただけに、葉氏の死去が今後中国政治に与える影響は少ない、と北京ではみられている。しかし、依然同党内に残存するといわれる現行経済政策路線に批判的な「保守派」や、かなり多数の軍首脳によって「革命第一世代の象徴的人物を失ったという点で大きな痛手だ。逆に鄭、胡、趙主流派にとっては、現在の大胆な改革路線がますます遂行しやすくなったともいえる。」

◆中嶋頼雄・東京外国語大学教授の話「葉劍英氏は朱徳、彭徳懐と並ぶ強大元帥の一人で中国共産党や軍に強い影響力を持つ人物。鄧小平のお目付け役的存在で、毛沢東や文革をなげかけた的に受けとめていた鄧小平路線に批判的だった。とはいえ鄧小平氏らとともに革命中国を築いた古者がいなくなつたことで一つの時代が去つたとの感が強い」